

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 19 日現在

機関番号：32421

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720114

研究課題名（和文） 文壇と出版メディアによる戦時体制の編成と展開に関する研究

研究課題名（英文） Study on the War organization and the Progressing of Media and the literary world during Wartime.

研究代表者

掛野 剛史（KAKENO TAKESHI）

埼玉学園大学・人間学部・准教授

研究者番号：00453465

研究成果の概要（和文）：

戦時下の時局雑誌『現地報告』全 67 冊について実証的なデータおよびその総目次を提示したほか、その分析によって誌面展開の変遷を具体的に明らかにし、戦時下における雑誌および出版社の活動を浮き彫りにした。また従軍記における戦争表象と、戦地で編集された雑誌『兵隊』との連関を研究した。

研究成果の概要（英文）：

In this research, the positive data and the total table of contents of the situation magazine "Genchihokoku" (all the 67 volumes) were shown. Changes of space deployment were concretely clarified by the analysis. And The magazine under wartime and activity of the publishing company were clarified. Moreover, connection with the war representation in an account of the war and the magazine "soldier" edited in the battlefield was studied.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：メディア・文壇・戦時下

## 1. 研究開始当初の背景

本研究が対象とする戦時下の文壇と出版

メディアについては、桜本富雄『日本文学報国会』（1995）や高崎隆治『戦時下のジャーナリズム』（1987）といった、いわゆる在野の研究者によって実態の解明、資料の発掘紹

介などが行われてきており、日本文学報国会やペン部隊の活動など、作家の戦争参加の実態やそれに関わる問題が明らかになってきていた。またそれに付随する形で、戦時下の出版物が紹介され、作品発表だけにとどまらない作家の動向も多方面から検討されつつあり、神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家』（1996）、神谷忠孝・木村一信編『〈外地〉日本語文学論』（2007）といった成果はその代表的なものの一つである。

一方で、戦時下のメディアについては、その言論統制の面が前面に出るゆえに、戦争への抵抗、もしくは協力といった観点からの言及が多くあった。ただ戦時下の著名な出版物の全体像は意外なほど明確ではない点が多い。たとえば文芸春秋社による『現地報告』や、改造社による『大陸』といった、文学研究においても重要な出版社による時局雑誌については、基礎的書誌データが存在しない。さらに、こうした出版物における活動は、文学研究の側からはほとんど言及されていなかった。残存資料が少ないといった物質的な制約があることもその一因だが、こうした出版メディアの戦時下の活動の細部と全体像を明らかにしつつ、文壇を含めたネットワークとしてどのように戦時体制が形成されていくかという問題、そしてそのネットワークの中で作家たちはどのように身を処し、文学表現を展開したのかという問題を考察する余地は大いにあると考えられる。

戦時下の出版物については近年「『帝国』戦争と文学」「〈戦時下〉の女性文学」（ゆまに書房）といった復刻版シリーズの刊行も続いており、そうした刊行物を利用しながらの研究が期待されるどころであり、またメディアの中でも特に放送（ラジオ）については成果が多く、竹山昭子『史料が語る太平洋戦争下の放送』（2005）、貴志俊彦他編『戦争・ラジオ・記憶』（2006）といった成果があり、文学研究の領域においても、戦時下の放送メディアを中心に、メディアと文学の問題を考察した坪井秀人『声の祝祭——日本近代詩と戦争』（1997）などの豊かな成果がある。こうした研究と接合することによって、従来の研究にさらに厚みを増すことが期待されていた。

また統制下の書物の流通の実態については、『資料 日配時代史』（1980）などはあるが、それを具体的な文学作品の受容や供給の問題として捉え直すような視点が求められていた。

## 2. 研究の目的

戦時期の文壇と出版メディアは戦争にいかに対処し、戦時下の活動を展開したのかという問題、具体的には戦時下における文壇と出版メディアの相補的関係を実証的方法によって明らかにして、その展開を分析することを目的とした。

特に、文芸春秋社発行の時局雑誌「現地報告」について雑誌記事を含めた基礎的書誌データを整備することを目標にしながら、全国で行われた文芸戦後運動や、具体的な統制下の書籍の流通など出版展開の実相を明らかにする。さらに実証的データと分析を踏まえて、最終的には、文壇と出版メディアの戦時体制の構築とその展開を動的に分析することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究においては、まずは資料の入手、およびその整備に重点を置き、実証的な立場からの分析考察に努めた。

特に戦時下の出版物、なかでも文学者が創刊や編集に関わった雑誌を、復刻や複写を含めて可能な限り広く収集した。

これらについては、終着点は存在しないようなもので、際限ないものではあるが、広く研究機関や図書館などを廻り、また古書店なども最大限に活用しつつ収集に努めた。

雑誌に関しては戦時下の雑誌で特に資料的な整備が遅れており、本格的な分析がなされていないと思われる、『現地報告』『大洋』『北支』『新若人』『征旗』といったものを中心に収集に努めた。これらについては複写などにも努め、また復刻版についても『言論報国』『兵隊』といったものを中心に購入した。

書籍に関しては、雑誌との相互関連も意識しつつ、戦時下の従軍記を中心に収集した。

出版社としては、文芸春秋社の出版物に主に焦点を合わせたが、それは『文芸春秋』といった総合雑誌の文芸欄が文壇で定評がある舞台だと認識されていたということ、また『オール読物』といった文芸誌、『話』といった大衆誌も同時期に発刊していたこと、戦争の進展とともに、当初は本誌の増刊だったものを『現地報告』という時局雑誌として独立した雑誌として発刊したことなど、戦時下において文壇との関わりをみるのに適した出版社であると考えたためである。

また、特に従軍記については、同時期に同じ地域に従軍した林芙美子、石川達三の三者の従軍記を考慮に入れながら、特に火野葦平

の兵隊三部作といわれる「麦と兵隊」「土と兵隊」「花と兵隊」の分析を行った。

作品における戦争表象を比較する上で、火野葦平が戦地で編集した兵士による兵士のための雑誌『兵隊』誌面を考慮に入れ、誌面における兵士の姿や、執筆者や投書などを含めた内容の展開の分析を行い、火野葦平という作家が、『兵隊』というメディアを意識しながら、戦争をいかに認識し、作品内で表象したのかという問題を考察した。

#### 4. 研究成果

まずは 1937 年より文藝春秋社が臨時増刊として発行し、後に月刊となった時局雑誌『現地報告』について、その解題を付し、書誌的データを実際の資料に基づき整備し、全 67 冊にわたる雑誌の細目を完成させたというものが大きな成果であろう。

「戦時期メディアの編成と展開——文藝春秋社発行『現地報告』総目次（下）」（『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』）として発表し、前年度にすでに発表した「戦時期メディアの編成と展開——文藝春秋社発行『現地報告』総目次（上）」と併せて全 67 冊の全体像を明らかにするとともに、誌面の展開を具体的な目次細目から一覧できるようにした。また当該雑誌の「発売禁止」処分についても実際の誌面状況と処分内容を対応させ、その実態を明らかにした。

著名な雑誌であり、また時局の展開を敏感に察知してその姿や形を変えていった戦時下の特徴的な雑誌でありながら、それを一望できるような目次がなく、その全体像を把握することが困難であったが、今回の成果によってその問題が解消し、戦時下メディアの研究の進展に大いに資することになると思われる。また今回の研究期間内では、達することはできなかったものの、文藝春秋本誌や、その他に発行していた『大洋』『話』といった雑誌についても、『現地報告』との連関といった新しい視点から考察することが可能になり、さらには同時期の他出版社の時局雑誌、たとえば改造社の『大陸』や第一書房の『北支』、旺文社の『新若人』などについても、その差異や同質性を考慮しながら比較考察することが可能になるだろう。今後の考察へとつながる足がかりを得たものと考えられる。

戦時下における出版メディアのメディアイベントの詳細や、文壇との相互連関については、今回の研究においては踏み込めなかったものの、さまざまな資料収集が果たせたこ

とにより、今後そうした方向への研究の発展が期待できる。

また戦地で現地の兵士によって発行された雑誌『兵隊』について、その誌面を分析した。『兵隊』は、中央文壇や出版メディアの動向とは異なる地点で編集された周縁のメディアではあるものの、兵士による兵士のための生きたメディアである。そのメディアの動向や読者の様態を詳細に分析することを通して、中央文壇に発表された火野葦平の戦争小説と関連していることが浮き彫りにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

掛野剛史、戦時期メディアの編成と展開——  
文藝春秋社発行『現地報告』総目次(下)、  
埼玉学園大学紀要 人間学部篇、査読無、11  
号、2011、1～14

掛野剛史、書く兵隊・戦う兵隊——火野葦平  
と雑誌『兵隊』、アジア遊学、査読無、166 号、  
2013、122～133

[学会発表] (計 1 件)

掛野剛史、「散華」の若者たち——太宰治と  
戦時下の青年、三鷹ネットワーク大学企画講  
座、2011 年 7 月 6 日、三鷹ネットワーク大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

掛野 剛史 (KAKENO TAKESHI)  
埼玉学園大学・人間学部・准教授

研究者番号：00453465

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし